



南航路 北航路 中央航路

成功モデルとして世界に知られる鹿島港



④



⑤



⑥

④安全を最優先して航行 ⑤船内から見る工場夜景 ⑥約60分のクルーズを終えて帰港。非日常の世界を堪能

「国家プロジェクトとして進められた鹿島開発は、港湾の整備と企業の誘致により、周辺地域に雇用と所得を創出しました。これは日本の成功事例とされ、それらのノウハウがタイやミャンマー、アフリカ地域への開発支援にも活用されているんです」

最後に、市民の皆さんへのメッセージを伺いました。小野さんは、「乗船と海を好きになってほしい」

の出力やスピードを調整しながら運航しています。「巨大タンカーや大型貨物船が通るときは引き波が起るので、横波を受けて転覆しないよう波の正面に船首を向けます。他にも、鹿島港ではたぐさんの船が行き交っていますが、夜間は船と景色が同化して非常に見づらくなるんです。そのため、船に付けられている舷灯(右側が緑色、左側が赤色)を頼りに、相手の船の赤灯だけが見えるから自分の船は左側を通っているとか、両方の舷灯が見えるから正面にいるとか、判断しながら航行しています」

「世界中の港に影響を与えていると聞くと、誇らしい気持ちになりますね。もう一つ、待合室の売店で御船印を販売。これは、御朱印の船バージョンで、鹿島埠頭は日本旅客船協会公認の「御船印巡りプロジェクト」に参画しています。現在、全国に131社の御船印があるので、旅先で集めてみるもの楽しそうです。ちなみに鹿島港の御船印の絵柄は、見学船を操船する船長が描いた見事な水彩画が元になっています。」



茨城DC限定デザインの御船印

「何よりも安全が最優先のため、風速毎秒15メートル以上、波高1メートル以上、視程300メートル未満、そのいずれか1つでも当てはまると運航できません。加えて、うねりが大きくなって危険な場合なども、船長の判断で運航中止としています」

客の皆さんに、楽しい思い出を持ち帰っていただくのが一番の願いです。私たちの生活を支えている鹿島港で、非日常の夜景をお楽しみください」と話してくれました。

達崎さんは、「乗船した皆さんに、船と海を好きになってほしいですね。工場夜景クルーズをきっかけに、子どもたちが船の乗組員を目指してくれたらうれしいです」と言います。達崎さんは、海に面していない福島県郡山市の出身。だからこそ初めて海や巨大船舶を見た時の感動は大きく、同じ感動を乗客に味わってほしいと考えています。

さて、鹿島港工場夜景クルーズは非常に人気が高く、現在発表されている個人乗合便は全て完売。しかし、「次はいつ運航するのか?」などの航本数を増やせないのか?」などの声もあり、11月24日(日)、12月1日(日)、12月8日(日)の個人乗合便の追加運航が決定しました。詳しくは、市ホームページまたは、鹿島埠頭のホームページをご覧ください。身近にありながら、まだ知らないことが多い鹿島港。工場夜景クルーズで、その魅力を改めて体感してみませんか。



神殿のようにそびえ立つ穀物サイロ。飼料コンビナートは日本の食を支えている

用の塩ですが、夜に見ると神々しく感じられます。ここで少し船を停め、撮影タイムとなりました。

さらに中央航路を進み、330メートルを超える巨大タンカーが停泊する棧橋付近に到着。目の前いっぱい広がるコンビナート群の大自然は、息をのむような眺望です。夜の闇が濃くなって、鮮やかさを増す工場夜景。ここも格好の撮影スポットです。

### そそり立つ大型船と神殿のような穀物サイロ

さあ次は船を旋回し、中央航路を鉄鋼コンビナートに沿って進みます。目に飛び込んでくるのは、大型荷役機械が煌々と照らし出されたダイナミックな景観。通称「キリン」と呼ばれる巨大クレーンが、海に突き出ています。停泊中の大型船に近づく、まるで海の中に巨大なビルがそそり立っているようで、スケールの大きさに圧倒されました。

そこから船は北航路へ。飼料コンビナートのエリアには穀物サイロ群が立ち並び、まるで神殿のような荘厳な雰囲気が漂います。乗船中は、船内でも見晴らしの姿

化を楽しめます。1階席は視線が海面に近く、波しぶきが窓をぬらし臨場感たっぷり。2階席へ行くと、一気に視界が開けます。さらに2階後部のオープンデッキに出ると、潮風に吹かれながら工場夜景を堪能できます。船の速度は9ノット(時速約17キロメートル)ですが、もつとスピードが出てるように感じました。こうして1時間のクルーズを終えて帰港。接岸作業を待って、船を下りました。

### 安全航行を最優先する使命感

目を改めて、どのような思いで鹿島港工場夜景クルーズを実施しているのか、小野さんと船長の達崎航さんに話を聞きました。2人が最も重視しているのは、安全運航の徹底です。

「何よりも安全が最優先のため、風速毎秒15メートル以上、波高1メートル以上、視程300メートル未満、そのいずれか1つでも当てはまると運航できません。加えて、うねりが大きくなって危険な場合なども、船長の判断で運航中止としています」

す」と話す小野さん。

また、工場夜景クルーズでは、オープンデッキに出るときは、必ずライフジャケットを着用するのが決まり。船から転落するような事故が絶対に起きないように、夜間は乗組員にスタッフを加えた3人体制とし、子どもが勝手に立ったりしないよう、しっかりと目配りをしています。達崎さんは、うねりがあってもなるべく船が揺れないよう、エンジン

①「キリン」と呼ばれる巨大クレーン ②小野さん(左)と達崎さん(右) ③腰に巻くタイプのライフジャケット

